

【論文】

つばくらめ
「燕の子安貝」考
—古代のタカラガイ使用について—

木 下 尚 子

Historical and Cultural Study on Cowry Shells of Japan in the 8th - 11th century

Naoko KINOSHITA

要旨 (Abstract)

Cowry shells in Japan are found in coastal area from Ryūkyū islands to the south half of Honshū. 2 kinds of cowries were known in documents of the 10th century respectively; “Purple cowry” was regarded as medicine, so called “shells of horse genitals” were used more generally. The latter’s name was replaced by “shells of easy delivery” in the 17th century and then cowry became a kind of lucky charm of baby care. YANAGITA Kunio, a famous folklorist, considered that the folkways of cowries for easy delivery were originated in Ryūkyū islands in ancient time and spread to the north by people who carried cowries. In this paper I made clear what is “purple cowry” and “shells of horse genitals” in taxonomic classification by observation of the cowries of the 8th to 11th century. I concluded that “purple cowry” was imported from south China, and “shells of horse genitals” were from Honshū. In the Ryūkyū islands, archaeological remains and folkways of cowries similar to those of Honshū are rarely found, so the relation between two areas cannot date back far.

キーワード (Keywords) : 古代、タカラガイ、紫貝、ウマノクボガイ、貝子、荒瀬出土蔵骨器、薬師如来像胎内、柳田國男

はじめに

つばくらめ
燕の持ちたる子安の貝取りて賜へ。『竹取物語』で、かぐや姫は求婚者の一人である石上の中納言にこう伝えている。物語の「燕の子安貝」は、他の求婚者に求めた「蓬萊の木」や「龍の頸の玉」、「唐土の火鼠の皮衣」などと並んで、きわめて得がたい品として描かれている。竹取物語は9世紀末から10世紀初頭に成立したとされるので(片桐1999: p.86)、これは当時の人々のもつタカラガイの認識を投影するとみてよいだろう。『新編日本古典文学全集』では子安貝を以下のように解説する。

「子安貝」は宝貝の一種。長さ二、三寸。貝殻は黒褐色で美しい斑紋があるという。その形が女陰に似ているゆえに、古くから安産のお守りに用いてその名がある(片桐1999: pp.24～25)。

タカラガイ cowry, cowrie⁽¹⁾ は別名が子安貝であり、現在も安産のお守りとする伝承があるのでこの解説はわかりやすく、「燕の子安貝」を示す定説となっている。

ここで注意したいのは、物語内の「子安の貝」が、現在私たちが認識するタカラガイ(以下この意味で用いる場合「タカラガイ cowry」と表記する)と確かに同じものであるかどうか、である。こう思うのは、江戸中期の本草書『本朝食鑑』⁽²⁾に、今「子易貝」と呼んでいる貝は、もとは「宇末乃久保」

とよんでいたもので、「寶貝」は俗名だと書かれているからである⁽³⁾。その説明では、この貝は紫斑のある亀のような背をもち、腹の下は白、相向かって歯があり、ちょうど魚の歯のように細かい刻みがある、また出産に臨んでこれを持っていれば子を最も易く生めることから、俗に子易貝というところがある。貝殻の形状描写からみてこれは、まさにタカラガイcowryである。江戸期、タカラガイcowryの一般名称は「子易貝」であり、江戸中期以前の呼び名は「宇末乃久保」であった。

『本朝食鑑』でもう一つ気になるのは、この貝の正式名称が「紫貝」と記されている点である。現在の私たちからみると、タカラガイに紫を冠するこの名称には違和感があるが、これは一旦おくとして、ここで整理されるのは、本草学で「紫貝」と呼ばれた貝が江戸期以前には「宇末乃久保」であり、これが江戸中期以降一般に「子易貝」、「寶貝」となったという名称の変遷である。したがって『竹取物語』の「子安の貝」を、江戸期以降の名称である「子易貝」すなわちタカラガイcowryと一直線に結ぶこと⁽⁴⁾については、「紫貝」の実態を確認することを含めて、やや慎重な検討が必要ではないかと思うのである。

以下、江戸期以前の書物に記された貝の名称と、これらと同時代のタカラガイの実物を辿りながら、「燕の子安貝」の実態をあらためて確認したい。結論を先に述べると、「燕の子安貝」は定説通りにタカラガイcowryということに落ち着くのであるが、それでもこの問題を取り上げるのは、その過程で導かれる古代のタカラガイ使用状況と、タカラガイの文化的イメージを述べることに、いささかの意味があると思うからである。

さて、タカラガイが日本列島の南に多いことは周知の事実であるが、九州・四国・本州の沿岸でも大小40種以上のタカラガイが棲息していることは案外知られていない。タカラガイが、本州の黒潮海域の人々に身近な貝である事実を、議論の初めに共有しておこう（文末参考図参照）。遙か以前の縄文時代、本州の人々がすでにタカラガイを認識していたことは忍澤成視氏の研究に詳しい（忍澤2001、2018）。

1. 「宇末乃久保加比」と「紫貝」

1.1. 宇末乃久保加比

『竹取物語』と同時代に、貝類の名前を記した二つの書物が知られる。『本草和名』と『倭名類聚抄』である。

『本草和名』は延喜年間（901～923年）に深根輔仁⁽⁵⁾によって編まれた日本現存最古の薬物辞典（全2巻）で、おもに唐の『新修本草』に習い、そこに記された薬物に倭名を当てはめたものとされる。そこに以下の記述がある（①～③の番号は説明の便宜上のもの）。

「紫貝一名文貝出兼名苑 和名牟末乃久保加比」①

『倭名類聚抄』は承平年間（931～938年）に源順によって編纂された辞書で、漢語の倭名を知る上で有用な書物である。二十巻本と十巻本とがあり、それぞれに複数の写本・注釈本があるので、十巻本と二十巻本の記載をそれぞれ記す。

「紫貝 兼名苑云紫貝一名文貝 宇末乃久保加比見本草」（十巻本）⁽⁶⁾ ②

「紫貝 兼名苑云紫貝一名大貝 和名字萬乃久保加比見本草」（二十巻本）⁽⁷⁾ ③

①から③の記述において共通して引用される『兼名苑』⁽⁸⁾は唐代に編まれた語彙集とされるが現存していない。二書において引用されるところからみると、原本は遣唐使によって日本に伝わって

いたのだろう（林2001）。②と③の和名記載は文面から①の『本草和名』に拠っていることがわかる。まとめると以下のようになる：

- ・ 「紫貝」は、中国では「文貝」、「大貝」ともいわれる
- ・ 日本名はウマノクボガイである
- ・ 「紫貝」は薬物として認識されていた

「紫貝」の名称と、その別名が「文貝」、「大貝」であることを踏まえると、この貝殻は紫色をなし、特徴的な紋様があり、大型であったと推測できる。しかしこれだけの文字表記でそれが日本のウマノクボガイだと決められるものではない、文献に貝が図示されることのない当時であれば、対応可能な候補の貝殻のあるどこかで、文献と貝殻とが対比されたはずである。この対応を最初におこなった深根輔仁は代々朝廷に仕えた薬師の出身で、自身も天皇の侍医を勤めている。おそらく宮中で唐から持ち帰られた薬剤の「紫貝」に接する機会があったのだろう。実物をみてこれが日本でいうウマノクボガイに当たるものだと「同定」したのではないだろうか。

1.2. 紫貝

中国文献が記す「紫貝」は、どういう貝なのだろう。漢籍で「貝」字が使用されているので、これがタカラガイ類をさすことについて異論はないだろう。

紫貝の古い記録が、『詩経』に記された動植物についての注釈書『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』にある。この書物の著者および成立年代については議論があるが、最近は三国・呉の陸璣（261～303）説が優勢という（矢島2017：p.87）。この中に以下の記述がある。

「又有紫貝、其白質如玉、紫點為文、皆行列相當」（又た紫貝有り、其の白質なること玉の如く、紫点を文と為し、皆行列 相当る。）⁽⁹⁾

3世紀の書物として伝わる『爾雅注疏』解魚にも「紫貝」を見つけることができる。これは訓詁学の書『爾雅』⁽¹⁰⁾に晋の郭璞（276～324）が注釈したもので、次の文章を掲載する。

「今之紫貝、以紫為質、黒為文點」（今の紫貝は、紫を以て質と為し、黒を文点と為す。）⁽¹¹⁾

以上に拠ると、「紫貝」の特徴は、「白質如玉、紫點為文」または「以紫為質、黒為文點」で、文様は「皆行列相当」である。この条件にあうタカラガイを探してみよう。まず「白質如玉」についてだが、タカラガイはほとんどすべて磨かれた玉のような艶をもち、地肌は白いので、この条件では種をしばらくこむことは難しい。これに「紫點為文」を加えると、暗色の斑点文様をもつ複数種のタカラガイが候補となる⁽¹³⁾。これに「皆行列相当」という条件を加えると、該当するのはヤクシマダカラ一種にはっきり絞られる。ヤクシマダカラの背面には、短く細長い単位が縦方向に密に並んでおり、まさに行列という表現が相応しいからである（図2の8）。「紫貝」がヤクシマダカラであれば『爾雅』の注釈にある「以紫為質、黒為文點」にも対応する。

ところで、これらの文献を1500年ほど遡る時期の、安陽殷墟に、中国におけるこの貝類の普遍性を示す実例がある。南方から王都に集められた膨大な数のタカラガイのうち、キイロダカラ等とともに、もっとも多く出土したのがヤクシマダカラである。古代中国でこの貝がよく知られ注目されても不思議ではない。またこれらヤクシマダカラの殆どは死貝が採取されたもので、表面は水磨によって表層がなくなり全対に紫色を呈すものが多く、まさに「紫貝」である。古文獻の「紫」が、今日の紫色と同じ色をさすとみてよければ、この名称とヤクシマダカラの外観に矛盾はない。なお、水磨の浅いも

のは白地に黒味をおびた焦げ茶色の斑文が密に並ぶ本来の色調をなす。

以上から、中国の文献でいう「紫貝」はヤクシマダカラ *Mauritia arabica* (Linnaeus, 1758) である可能性が高いといえる。なお、ヤクシマダカラは殻長5～6cm前後のものが多く、先の『倭名類聚抄』にあった「大貝」という表現にもなじむ。

紫貝の文様の特徴を「皆行列相当」とまことに的確に表現した『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の著者は、実際にこの貝殻を見ていたのだろう。著者は陸璣であるとする説に従えば、呉人とされる彼が、南方の貝類に接する機会をもつことは十分ありえただろう。

すなわち、漢籍の「紫貝」はヤクシマダカラの可能性が高く、これが日本で双方の実物を知る知識人によってウマノクボガイに翻訳されたとみることができる⁽¹⁴⁾。

2. 古代のタカラガイ

以上から、古代の日本にヤクシマダカラが「紫貝」として存在したことが理解されるが、ヤクシマダカラは房総半島、島根半島以南のやや深いところに棲息し、その分布の中心は三宅島や八丈島の離島にある。本州側（房総半島）では未成貝が多く成貝の入手は容易でないという（忍澤2018：p. 6。図2の7）。このように得がたいヤクシマダカラが古代の日本でほんとうに使われていたのだろうか。以下に紹介するのは、タカラガイ使用の実態を伝える貴重な実例である。

2.1. 荒瀬出土蔵骨器内のタカラガイ

2.1.1. 三島格氏の報告

鹿児島県伊佐市菱刈町荒瀬で、古代の蔵骨器の中からタカラガイが発見されている（図1の1）。これは昭和30年（1955）頃、中学生が発見したもので、壺の中から焼けた人骨・銅製品2片とともに火気をうけたタカラガイ1個がみつまっている。本例は、すでに三島格氏による報告と詳細な考察がなされており（三島1977）、その中で以下が指摘されている。

- ・ 壺は蔵骨器に転用された須恵器で（現存高22.5cm、底径10.4cm）、平安時代のものとみられる。
- ・ 人骨はほぼ1体分が納められており、小児骨とは思われない。
- ・ 銅製品は長さ8.4cmの鐻（ケヌキ、ジョウス鐻子とも）で、火気をうけている。古墳時代から平安時代の類例がある。
- ・ タカラガイは殻頂2.8cm、殻径1.8cm。表面は火気をうけて炭化剥離しており文様は不鮮明で、加工は認められない。

以上にもとづき、三島氏は、本例を奈良末から平安初期のものとしている⁽¹⁵⁾。

2.1.2. 須恵器

タカラガイを容れていた須恵器壺は、現在鹿児島県歴史資料センター黎明館に保管されており、詳細を観察することができる（図1の2）。残念なことに、壺に供伴したというタカラガイと鐻は黎明館に伝わっていない。須恵器壺は全体に茶褐色をなす硬質の焼き上がりとなし、頸部以上を欠損する⁽¹⁶⁾。現存高22.3cmで、頸部と胴部の間、胴部最大径の位置に断面三角形の明瞭な突帯を廻らし、胴部下半に叩き締めによる縦方向の調整と回転ヘラ削り調整痕をもち、外開きの高台をつけることが特徴である。ただ蔵骨器に転用するためであろうか、高台部分は割り取られている。突帯から頸部にか

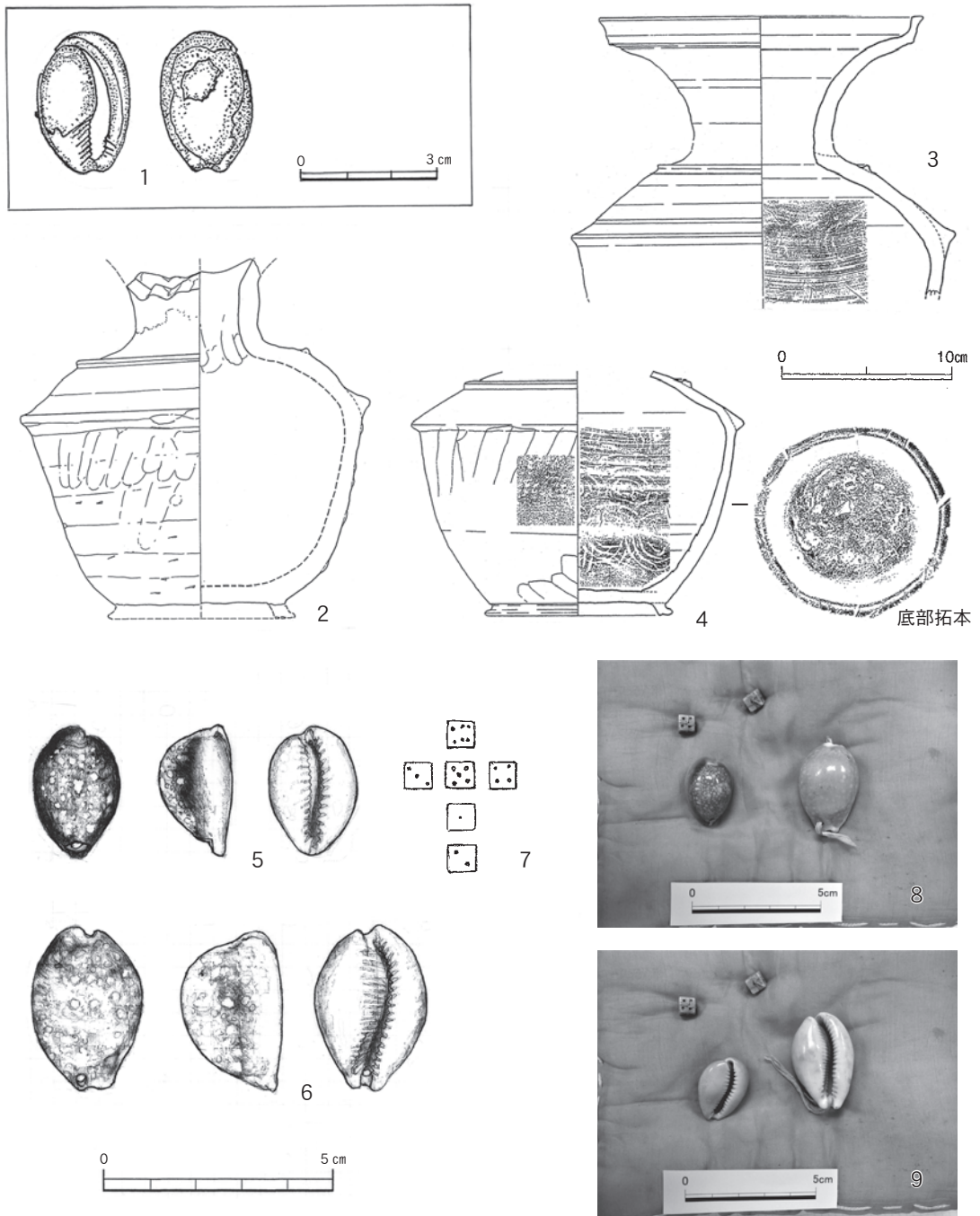


図1 古代のタカラガイと関連遺物

1～4. 鹿児島県荒瀬出土蔵骨器関係資料：1. タカラガイ（三島1977第7図）、2. 蔵骨器、3～4. 皮籠田A窯跡出土須恵器（網田2009：20頁）、5～9. 三重県四天王寺薬師如来胎内出土遺物：5. ハナマルユキ、6. ホシキヌタ、7. 賽子、8～9. 貝殻と賽子の保管状況

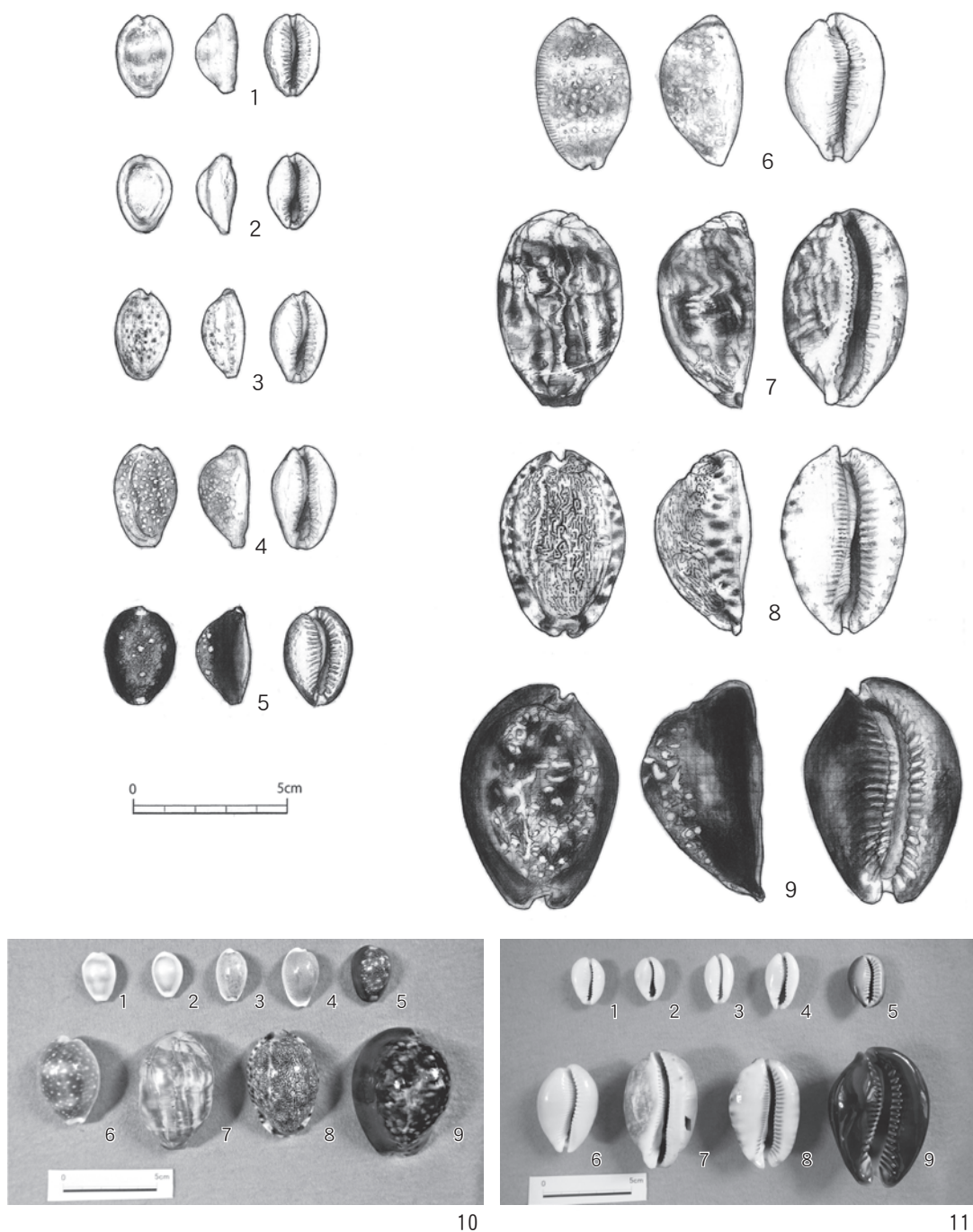


図2 房総・伊豆のタカラガイ

1. キイロダカラ、2. ハナヒラダカラ、3. オミナエシダカラ(以上館山波佐間西)、4. ハツユキダカラ(館山波佐間)、
5. ハナマルユキ(館山波佐間西)、6. ホシキヌタ(天津小湊・浜萩)、7. ヤクシマダカラ未成貝(館山沖ノ島)、
8. ヤクシマダカラ成貝、9. ハチジョウダカラ(以上八丈島大湊浦)、10. 1~9の背面写真、11. 同腹面写真(タ
カラガイ標本は忍澤成視氏資料、括弧内は採集地名)

けて一面に黄灰色の灰をかぶり、胴部下半部の表面には気泡による円形の凹凸が多数みられる。同様の器形は、荒尾市皮籠田窯跡の長頸壺にみることができる（図1の3、4）。この窯の須恵器を整理した網田龍生氏によると、その時期は8世紀後半という（網田2009：p.13）⁽¹⁷⁾。このことから、荒瀬の壺もほぼ同じ時期のものと考えられる。

2.1.3. 鐻

蔵骨器に伴った鐻は、平紐状に延ばした銅棒を中央で折り曲げた簡単な作りをなす。鐻は弥生時代以降、墓の副葬品としてしばしば出土するが、多くは同様の単純な形をなし、形状による時間的变化に乏しい。九州内の墓の副葬品をみると、時期による大きさの傾向に違いがありそうである。弥生時代中期の鐻（福岡県筑前町峯遺跡10号甕棺）では長さ9.3cm、古墳時代中期例（大分県臼杵市下山古墳）では11cm、同後期例（福岡市東油山古墳群E群）では13.2cm、同じく（佐賀市大和町礫石第2号墳）10cm、鎌倉時代例（13世紀前半 佐賀市大和町一本木遺跡）では7.0cm + α （先端部を欠損）である。九州の鐻は古墳時代以降小型化する傾向があるのかもしれない。このようにみると8.4cmを測る荒瀬例を、古代のものともみても矛盾はなさそうである。

以上から荒瀬のタカラガイの所属時期は、須恵器の時期から奈良時代後半を含む平安時代初めあたりに絞こむことができ、鐻も同時期のものといえそうである。

2.1.4. タカラガイ

三島氏の報告において、タカラガイの種は同定されていない。現在、この実物を確認することはできないが、三島氏による図面と大きさを手がかりにすると、これらはハナマルユキ *Monetaria caputserpentis*（Linnaeus, 1758）あるいはオミナエシダカラ *Erosaria boivinii*（Kiener, 1843）に近いというコメントを貝類学者の黒住耐二氏からいただいた。二つのタカラガイはともに房総半島で採取できる貝種だという。

2.1.5. タカラガイの意味

本例で特徴的なのは、タカラガイも鐻もともに火気をうけている点である。骨とともに焼かれたことは明らかであり、これらが被葬者と緊密な関係であったことが窺える。鐻は眉等を抜くために使われたとされ、鏡や櫛、白粉箱、歯黒箱、鋏や耳かきとセットをなす化粧道具の一つであった。13～14世紀には蒔絵手箱に納められた鐻を含む化粧道具一式が神社に複数セット奉納されている⁽¹⁸⁾。当時の上流階級では男女に係わらず化粧をしたようなので、化粧道具の存在をもって所有者の性別を決めることはできないが、とくに高い身分でない限り男性が化粧をしていたとは思えないので、一般には女性の持ちものであった可能性が高いといえる。

鐻と女性の関係は、さらに古く大分県臼杵市の下山古墳にみることができる。下山古墳は5世紀中頃の前方後円墳（全長68m）で、後円部に組合せ式の家形石棺を備え、くびれ部に石甲を立てることで知られるこの地域独特の首長墓である。昭和26年（1951）に大分県による発掘調査が行われ、成人男女1体ずつの人骨、銅鏡、管玉、鉄刀、鉄鏃、鉄鋌等が出土した。この女性人骨の頭蓋下で、「66個の細管玉・櫛などとともに」鐻が検出されている⁽¹⁹⁾。本例において鐻は明らかに女性に所属すも

のであった。

以上をふまえると、8～9世紀に鐻とともに火葬された荒瀬の人骨も、女性の可能性が高いといえよう。骨とともに焼かれたタカラガイは、被葬者の女性と密接にかかわる小品であったと考えたい。

2.2. 薬師如来座像胎内のタカラガイ

三重県津市栄町の四天王寺に伝わる薬師如来座像⁽²⁰⁾胎内に、文書（交名状⁽²¹⁾）、鏡等とともにタカラガイが2個納入されていた（図1の5、6）。本例は11世紀後半に時期を特定できるタカラガイ事例である。

2.2.1. タカラガイ

黒住耐二氏は薬師如来像内のタカラガイを実見し、これらがホシキスタ（殻長3.8cm）とハナマルユキ（同2.9cm）であること、さらにハナマルユキが重成貝であることに注目して、2点が本州産であり、最も近い採集地として志摩半島南部が考えられることを指摘した（黒住2007）。筆者も2019年6月に四天王寺でこれらを実見する機会を得た。ホシキスタ、ハナマルユキともに全面が一様に馴れて艶をもち、貝殻腹面の歯の細かい凹凸の面まで同じ程度に摩滅している点が注意された。摩滅の様子は2点の貝殻がともに常時布のようなものにくるまれていたことを示唆する。二つの貝殻の水管溝側には直径2mmほどの孔が丁寧にあけられている⁽²²⁾。孔の周縁は摩滅しており、紐が通されていたことがわかる。

この仏像は、交名状の記載によって、物部美沙尾^{もののべみさお}という女性の発願によることが記録から明らかである。願主の美沙尾が仏像の完成を待たずに亡くなったため、寺家目代の僧定尋がこれを引き継ぎ、像が完成した承保4年（1077）に薬師如来座像の胎内に以下の品々を納めたのである。結縁交名状、貢進状（その1～その3）、民部田所勘注状、唐草双鳳鏡1面、木製3枚、扇骨5本、縫針7本、麻布1枚、絹小袋1口、賽子^{さいこ}2個、瑠璃玉1顆、包裂、タカラガイ2個。これらは「いずれも女性の生活に関係深い品であるので、物部美沙尾ゆかりの品」とされる（水野1967：p.46）。

2.2.2. 賽子

仏像に納入された品々の中に賽子が2個ある（図1の7）。一辺6mmの骨製の小品である。これも願主ゆかりの品であるとすれば、どのような関係で納入されたのだろうか。賽子について研究をまとめた増川宏一氏は、『小右記』長和2（1013）年の記事に、中宮の出産後の儀式に賽子をふったという記録（擲采の戯）⁽²³⁾に注目し、これには赤児の将来を占う意味があったのだらうとしている（増川1992：p.187）。仏像に納められた賽子も、上と同様の使われ方をしていたとみてよいだろう。ともにあったタカラガイも出産との関係で考えたいところであるが、これを示す根拠の資料がない。確実なのは、11世紀後半において、タカラガイが女性とかかわる意味をもっていたということまでであろう。

3. 子安信仰と燕とタカラガイ

述べてきたことをまとめよう。

- ・ 3世紀以降の中国文献の「紫貝」はヤクシマダカラであった可能性が高い。

- ・ 10世紀前半、中国の「紫貝」は日本ではウマノクボガイと認識された。
- ・ 8世紀後半、女性骨を納めたとみられる蔵骨器に本土産のタカラガイが伴っている。
- ・ 11世紀後半、本土産タカラガイは女性に特有の持ち物であった。

以上から、8世紀後半以降11世紀後半の間においてタカラガイは女性との結びつきが強く、ウマノクボガイと呼ばれており、実際には本土産の小型～中型のタカラガイが使用されていた、ということが理解される。

以上をふまえると、9～10世紀に成立したとされる『竹取物語』の「燕の子安貝」はどのように意味づけられるだろうか。

当該期に「子安貝」という貝を探すことはできないが、「子安」という言葉は『三代実録』清和天皇の貞観18年（876）七月十一日にみられる。そこに記された「美濃国正六位上児安神」が「児安」の初出とされる（鎌田1972）。子（児）安神は「安産・子授け・子育てなどの祈願をする神」とされ、出産・育児にかかわる信仰がすでに存在したことがわかる。『竹取物語』では、燕が出産時に出す貝が子安貝だと説かれているので、「子安」の名がみえる限りこれが安産の貝であることは当時の人にも自明であったろう。述べてきたように、当時すでにタカラガイは女性にかかわりの深い存在であったので、この「燕の子安貝」が出産行為と女性を仲立ちにしてタカラガイに結びついたことに疑問の余地はない。物語ではこの時期すでにあったウマノクボガイという呼称が避けられているが、この話を聞かれたものがそれが件の貝であることを理解したのだろう⁽²⁴⁾。

ここでタカラガイがとくに燕と結びついて語られていることについて述べておきたい。これに類することが先の『本草綱目』の「石燕」の項に、『新修本草』からの記事として記されている。中国には「石燕」とよばれた化石の漢方薬があるという。これを引用した南方熊楠氏の訳⁽²⁵⁾によると「それは爪のような形の化石で、はっきりした性別があり」、「粉末を目に吹き込めば障翳（しょうい）^{しょうい}（目の病）を去る。しかし最も注目すべき効能は、雌雄の各一片を陣痛に苦しむ妊婦の両手に握らせたときに著れる。たちまち彼女は重荷から解放されるのである」（南方1985：pp.296～297）。『新修本草』は唐代の書物なので、この知識あるいは書物そのものが古代の日本に伝わっていれば、化石名にある燕が、出産にかかわって登場する蓋然性が生まれる。こう考えてよければ、先にのべた薬師如来座像胎内でみつかったタカラガイが2個であったことにも、出産時に両手に握らせるという共通の意味を認めてよいかもしれない。

以上、タカラガイと子安信仰燕との関係について、一通りの説明をつけることができた。ただこれが文字通りヤクシマダカラを示したものかどうかは検討の余地がある。以下この問題を考えよう。

4. 古代のタカラガイ消費

10世紀前半に成立した律令施行細目である『延喜式』⁽²⁶⁾の卷三七、宮内省典薬寮「諸国進年料雑薬」に、タカラガイとみられる「貝子」3斤が上総国から納められたという記録がある。

4.1. 「貝子」

『延喜式』に「貝子」という名称のみが記され、正式名称である「紫貝」のないことがやや不思議である。同時期の『本草和名』も『倭名類聚抄』も「紫貝」のみを掲載し、「貝子」を使っていないからである。「貝子」は何をさすのだろう。その600年後に編まれた『本草綱目』には「貝子」が「紫

貝」とは別に詳しく説明されている。本論にかかわる部分を抽出すると以下ようになる⁽²⁷⁾。

- ① 貝の字は象形の文字であって、その中の2点はその齒列を象り、その下の2点はその垂れた尾を象ったもの。
- ② 古代には貝を貨幣とした。
- ③ 貝子とは小貝子のことで、大きさは拇指の頂ほど、長さは1寸ばかり、背も腹もみな白い。
- ④ 種類が多い。
- ⑤ 貝子は焼いたり、研ったりして薬として用いる。

上の①と②から、これがタカラガイのことを指しているのは明らかである。③でそれが殻長3cm前後の中・小型のタカラガイをさすことがわかり、④で貝子がタカラガイの種類を限定しない中・小型のタカラガイの総称であることがわかる。参考までに同書の「紫貝」の項をみると、貝子に似た形のもので大きさが2～3寸あるとしている。以上からみると、「貝子」はヤクシマダカラのような大型のタカラガイではなく、それ以外の中・小型のタカラガイをさす名称であったとみてよいだろう。

先にみた『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』には、「紫貝」の前に以下の文がある。

其文彩之異、大小之殊、甚衆。古者貨貝是也。餘蜆、黃爲質、以白爲文。餘泉、白爲質、黃爲文。又有紫貝（以下略）。（其の文彩の異、大小の殊、甚だ衆し。古は貨貝 是なり。余蜆は、黄を質と爲し、白を以て文と爲す。余泉は、白を質と爲し、黄を文と爲す。又た紫貝有り、（以下略））⁽²⁸⁾

同じく『爾雅注疏』には以下がある。

以白爲質、黄爲文點。今之紫貝（以下略）。（白を以て質と爲し、黄を文點と爲す。今の紫貝は、（以下略））⁽²⁹⁾

二つの記載は、3世紀の中国の人々が、タカラガイに多くの種類があること、さらに戦国時代以前に使用されたタカラガイを「餘蜆」、「餘泉」と認識していたこと、現在はこれらと区別して「紫貝」のあることを述べている。文の内容を商周代の考古遺物と対照すると、「餘蜆」、「餘泉」はそれぞれキイロダカラ、ハナビラダカラであろう。これらを含む「紫貝」以外の中・小型のタカラガイが3世紀以後のいつの頃かに中国で「貝子」と呼称され、「紫貝」とともに日本に伝わっていたのではないだろうか。『延喜式』に登場する「貝子」をこのように考えておきたい。

10世紀に上総国から貢納された「貝子」は、「紫貝」とは区別された中・小型のタカラガイであったとみてよいだろう。

4.2. 上総国貢納の「貝子」

上総国のある房総半島の沿岸は本州でもタカラガイが多く打ち上がる地域に連なっている（文末参考図）。以下、忍澤成視氏等先学の詳細な調査成果（忍澤2011：pp.203～245）に依拠しつつ、『延喜式』に記された上総国の「貝子」の実態を調べよう⁽³⁰⁾。なお、「紫貝」を特別視する当時の価値観をふまえると、ヤクシマダカラのように大型のものが珍重されたとみられるので、貝殻の大きさに注意してみてゆくことにしたい。

図3は、海岸に打ち上ったタカラガイ38種を、大きさ別に分けて地域ごとに示したグラフである。大きさの基準は忍澤氏に従い、殻長51.1mm以上を大型、同32～51mmを中型、同31mm以下を小型とする（忍澤2011：p.206）。大型のタカラガイは房総半島にもわずかにみられるが、伊豆諸島に多く、三浦半島にはほとんどない。

図4は、大型タカラガイの地域ごとの内訳である。もっとも普遍的なのはホシキスタである。ヤクシマダカラが三浦半島にもみられるが、この地域のものは成長が停止した幼貝が多いという。ヤクシマダカラの成貝とハチジョウダカラ伊豆諸島以外では入手は困難といえよう。

図5は、中型タカラガイについて同様に示したものである。オミナエシダカラ、ハツユキダカラ、ハナマルユキの多いことがわかる。

以下に大型と中型の主要なタカラガイの大きさ(殻長)を示す。

ヤクシマダカラ：大型（30～86mm）

ハチジョウダカラ：大型（44～118mm）

ホシキスタ：大型（24～79mm）

オミナエシダカラ：中型（17～42mm）

ハツユキダカラ：中型（11～49mm）

ハナマルユキ：中型（17～41mm）

以上をふまえると、『延喜式』の時期に上総国で集められたのは、大型ではホシキスタ、中型ではオミナエシダカラ、ハツユキダカラ、ハナマルユキを中心とする内容であったことが推測できる。

当時大型貝が珍重されたとすれば、貢納貝の中にもホシキスタが含まれていたであろうが、『延喜式』では、これを本草書にみえる「紫貝」とせず、「貝子」と認識している。当時の典薬寮の人々が中国の本草学を理解し、実物を区別する正しい知識をもっていたということがわかる。

4.3. 「貝子」の流通

『延喜式』の「貝子」3斤⁽³¹⁾は、薬草とともに薬として貢進されており、『本草綱目』に記されるように、貝殻は粉碎して使われたのだろう。当時の3斤は、中国唐の基準を参考にすると約2040gである⁽³²⁾。殻長3～4cmのタカラガイ打上貝^{うちあげかい}の平均的重さを10.5gとすれば⁽³³⁾、3斤は貝殻195個分に相当する。

当時平安京の典薬寮には、厳選された大型・中型のタカラガイが集積していたであろう。これらは薬として輸入された中国産の「紫貝」すなわちヤクシマダカラと、房総産の「貝子」であったと考え

図3 打ち上げタカラガイの地域別・大きさ別比較
(総数：144979)

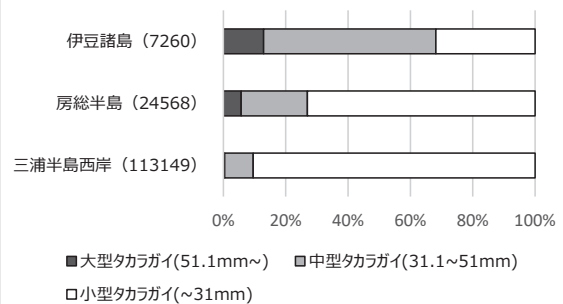


図4 大型タカラガイ打ち上がり数の
地域別・種別比較 (総数：2819)

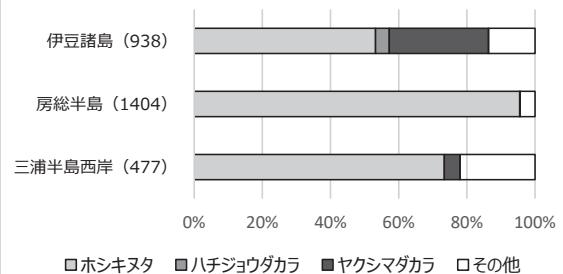
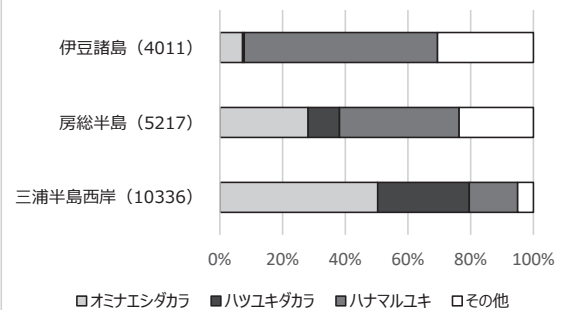


図5 中型タカラガイ打ち上がり数の
地域別・種別比較 (総数：19564)



られる。ここで思い出したいのが、先に記した蔵骨器内のハナマルユキ・オミナエシダカラ、平安仏内のホシキヌタとハナマルユキである。これらの貝殻が上総からの貢納品と同じ種類であることに注意したい。8世紀から10世紀にかけて、「貝子」は都に納められるのと同時に、一般にも流通し始めたのではないだろうか。こうしてこれまでタカラガイに疎遠であった市井の人々にもこの貝殻の存在が知られ、「ウマノクボガイ」という名前がつけられ、『竹取物語』の笑い話の道具として登場することになったのではないだろうか。

以上から、『竹取物語』の「燕の子安貝」は、「紫貝」ではなく、国内産の大・中型のタカラガイーホシキヌタ、オミナエシダカラ、ハツユキダカラ、ハナマルユキなどであった可能性が高いといえる。図2の3から6の貝殻をイメージすればよいであろう。

5. 南島のタカラガイ習俗

論じてきたこととの比較のために、琉球列島のタカラガイ習俗についても述べておきたい。以下説明の便宜上、琉球列島を「南島」と表現し、日本列島の琉球列島以外の地域を「大和」と表現する。

8世紀から10世紀、大和と南島は、赤木やヤコウガイを介して一定の往来関係をもっていた（山里1999）。大宰府には8世紀前半に南島から物品の貢上のあったことを示す木簡も知られているので、南島のタカラガイ、とくに大型の「紫貝」が大和にもたらされる可能性がなかったとはいえない。しかし南島にヤクシマダカラを含むタカラガイを大和にむけて集めたとみられる遺構は未発見であり、大和側にも輸入の痕跡は知られていない。現在のところ、古代の大和と南島間にタカラガイを介した文化的関係はほぼなかったとみてよい。

南島の人々にとって、タカラガイはどういう意味をもっただろう。加工されたタカラガイは先史時代の南島の遺跡においてしばしば出土するが、出土状況や数量に固有の意味を認めるうる事例は見られない。これが明確になるのは漁網錘としてのタカラガイ使用が増える14世紀以降である。この時期のタカラガイは、個人用の投げ網、叉手網から集団で使う追い込み網、飛び魚網などの縁辺に一列に並ぶように取り付けられた。使われたのはハナビラダカラ・ハナマルユキ・ヤクシマダカラ・ホシダカラ等で、大和では貴重なヤクシマダカラやホシダカラが惜しげもなく使われている（島袋2018）。このほか、14世紀以降の明との朝貢貿易では、ハナビラダカラとキイロダカラが大量に集められ、貢納品等として海をわたった（中山ほか2007）。このように消費されたタカラガイについて、沖縄で、例えば安産を願うような抽象的な意味があったという伝承は聞かれない⁽³⁴⁾。南島の人々にとって、タカラガイは数多ある貝殻素材の一つに過ぎなかったようである。

6. 柳田論からの開放

タカラガイは奄美・沖縄により多くの種類が棲息するため、文化的に南のイメージで認識される傾向が強い。しかし述べてきたように、実際には大和にもひろく見られ、独自の文化認識が形成され、継承されている。

南に偏ったイメージには二つの背景があるように思う。一つは『竹取物語』における描かれ方である。「燕の子安貝」はかぐや姫が与えた難題の一つという位置付けなので、他の難題である蓬莱や唐土と同様に遠方の珍品という前提がある。このことから、実際には、当時大宰府を介してその存在が知られていた遠い「南嶋」が想定されたのであろう。ただ、これは物語の構造上自然なことであった。

もう一つは、柳田國男氏（1875－1962）による海上の道の仮説である。柳田氏は、中国青銅器時代のある時期に中国南部から琉球列島を北上して日本に到達した稲作民の一群がいたことを想定し、これについて「私は是を最も簡単に、たゞ寶貝の魅力の爲と、一言で解説し得るやうに思つて居る」とのべている（柳田1961：p.23）。柳田氏はタカラガイの「實際の分布は黒潮の及ぶところ、太平洋岸は茨城福島の間まで、日本海側は富山縣を限りと言はれて居る」ことを早く認識していたが、それらは「種類が少なく美しいものは無く、殊にうつせ貝のあざれて濱に寄るものばかり」だと、南島のタカラガイと本州のものをはっきり区別している（柳田1961：p.26）。この区別は、氏が沖縄を訪問した際、尚順男爵によるタカラガイのコレクションを実見し、その時の強烈な感動に根ざしている。柳田はその30年後、「首里からすぐ近い別荘の前の海で、手づから撈ひ捕られたものばかりといふのに、名も附けきらない程の何百といふ種類で、形よりも色と斑文の變化が目ざましく、今でもあの驚きを忘れることが出来ない」（柳田1961：p.155）と記している。琉球列島から本州へと達した人々が「色なりつやなり圓みまでが、子安貝のそれに近かった」と認識したズズダマ（ジュズダマ、*Coix lacryma-jobi*）をタカラガイの代用にしたのではないかという氏の仮説は、その感動の源がタカラガイ生貝の艶であったことを示している（柳田1961：p.176）。氏は沖縄方言のツシヤやおもろの文言を介してこの証明を熱心に試みた。また「この極東の島々の中でも、中部以北の海岸は黒潮の影響に遠く、たまたまあつても此貝の種類が乏しく、又著しく美観を歛き、或はこのあたりが石類との交替の堺であつたやうにも考へられる」として、艶やかなタカラガイの欠乏が美石の勾玉等の登場になるとも述べている（柳田1961：p.170～171）。柳田氏にとって沖縄のタカラガイは、まことに大きな意味をもつ存在であった⁽³⁵⁾。

柳田氏のこうした一連の仮説はその晩年に形をなしたもので、「寶貝のこと」（1950年）、「知りたいと思ふこと二、三」（1951年）、「海上の道」（1952年）、「人とズズダマ」（1953年）において繰り返し述べられている。この考えは一般に「海上の道」説として、その叙情的な香りとともに人文学に長く記憶されてきた。その後考古学の調査成果により、中国青銅器時代に琉球列島を北上した人々の存在が主張されることはないが、一方で古代の九州と琉球列島との関係が急速に解明され、タカラガイは物語文学の中で一人南の香りを保ち続けているように見える。ただそれについても、歴史的にはその存在が大和内で完結する、ということはこれまで述べてきた通りである。日本のタカラガイの文化は、琉球列島とは別個に形成されたといえる。

7. 結語

『竹取物語』の「燕の子安貝」をめぐり、以下を指摘した。

- ・ 「燕の子安貝」として古代の人々が実際にイメージしたのは、ホシキヌタ、オミナエシダカラ、ハツユキダカラ、ハナマルユキ等の大・中型タカラガイであった。
- ・ これらは房総半島等で採集され、薬剤の「貝子」として朝廷に貢納されたタカラガイと同一種であり、一般にも普及した貝殻であった。
- ・ タカラガイは中国本草書で「紫貝」、「貝子」と記された。紫貝はヤクシマダカラ、貝子はその他の中・小型タカラガイであった可能性が高い。
- ・ タカラガイは古代の大和において、「紫貝」、「貝子」という本草名とは別に、一般にウマノクボガイと呼ばれており、すでに存在した子安信仰と結びついて安産や女性に関係の深い存在と

なった。

- ・ ウマノクボガイが子安貝、寶貝という名称を得たのは、文献で見る限り江戸中期である。
- ・ タカラガイと女性や出産を関連させる習俗は大和独自のものであり、南島のタカラガイ習俗との関連は認められない。

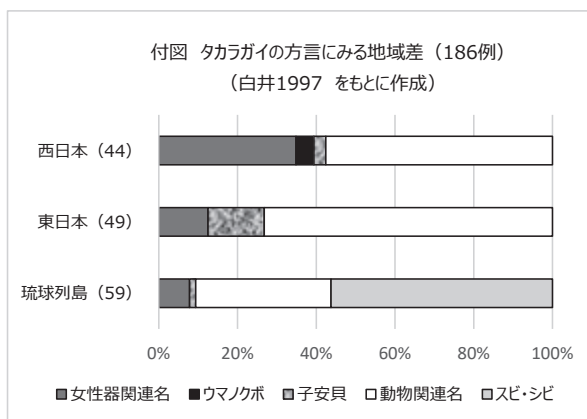
小稿をまとめるに当たり文献資料の解説については熊本大学人文社会科学研究部の小林晃氏、屋敷信晴氏に教示を仰ぎました。資料収集等において以下の方々にご協力、ご教示を賜りました。記して感謝いたします（敬称略）。網田龍生、忍澤成視、倉島隆行、黒住耐二、竹森友子、坪内大紀、森田誠、鹿児島県歴史資料センター黎明館、曹洞宗四天王寺、菱刈町教育委員会。

注

- (1) タカラガイは熱帯産の海産の巻貝である。本文ではタカラガイ科 Cypracidae の総称として「タカラガイ」を用いる。日本には黒潮の影響の及ぶ地域に88種生息するとされる。
- (2) 「紫貝 古訓字萬乃久保 今世稱子易貝」。『本朝食鑑』は、人見必大が元禄10（1697）年に著した本草12巻10冊の書。日本の食物全般について分類し、これに従って品ごとに性質、毒性、栄養、食法その他を詳しく説明する。李時珍の『本草綱目』の強い影響のもとに成立し、そこからの引用が多いとされる。
- (3) 「寶貝 俗名。大貝 兼名苑。」「其殻婦人求蓄以為臨産之備耳。」「謂臨産之時持之則生子最易故俗稱子易ノ貝」。
- (4) タカラガイの名称については、『本草食鑑』以後の本草書や百科事典で「子安貝」、「こやすがひ」、「たからがひ」の表記が普及し、19世紀半ばに彩色図版入りの貝類書『目八譜』が刊行されるに至って実物と名称との対応が確実なものとなった。分類名称もここで「紫貝」から「貝子・子安貝・寶貝」となり、この中の「寶貝」が現在の分類名（和名）に継承されている。『目八譜』は天保14（1843）年に武蔵石壽によって記された15巻の貝譜。巻之十にタカラガイ47種を分類して示す。
- (5) 深根輔仁は醍醐天皇に仕えた侍医・権医博士。引用した本文は寛政8年（1796）の和泉屋庄次郎による版本（国立国会図書館オンライン）によった。
- (6) 『箋注倭名類聚抄』（京都大学文学部国語研究室編1968）による。狩谷掖斎が文政10（1827）年に完成させ、明治16（1883）年に刊行された。狩谷は自ら伝本・写本を収集し比較して10巻本（京本）を源順著編とし、10巻本7種、20巻本4種を考証して注を施した。
- (7) 『元和古活字那波道圓本』（京都大学文学部国語研究室編1968）による。これは那波道圓が校訂刊行した元和3（1617）年の古活字版。近世流布本の直接の祖本とされる。
- (8) 釋遠年によるとされる語彙集。亡失して伝わらない。
- (9) 陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』（増訂漢魏叢書本）による。以下に原文を示す：「成是貝錦」貝、水中介蟲也。龜鱉之屬。大者蚌、小者爲貝。其文彩之異、大小之殊、甚衆。古者貨貝是也。餘蚌、黃爲質、以白爲文。餘泉、白爲質、黃爲文。又有紫貝、其白質如玉、紫點爲文、皆行列相當。其大者常有徑一尺、小者七八寸。今九真交趾、以爲杯盤寶物也。本文内の書き下し文は屋敷信晴氏による。
- (10) 『爾雅』は春秋戦国時代以降の古典の語義解釈を漢代に整理補充したもので、中国最古の辞典とされる。

- (11) 『爾雅注疏』 卷九。中国哲學書電子化計劃による。本文内の通釈は屋敷信晴氏による。
- (12) 貝類については奥谷編2017によった。
- (13) ヤクシマダカラ、ムラクモダカラ、ヒメホシダカラ、ヤワハダダカラ、コバンダカラ、ヒロクチダカラ、カバフダカラ、ラバウルダカラ、メダカラ、マメシボリダカラ、ゴマフダカラ等。
- (14) このことをいち早く指摘したのは生物学者の白井祥平氏である。ただその根拠が筆者とは異なる。白井氏はタカラガイについて膨大な資料をもとにその名前の由来や文化史的意味を独自に追究している。(白井1997)。
- (15) 三島氏は1977年の補記で、蔵骨器の年代を平安時代から、「奈良末－平安初期」と訂正している。ただその根拠は示されていない。
- (16) 器壁の厚さは1 cmで、全体に頑丈な作りをなす。胴部の突帯下には粘土を積み上げた単位がゆるい凹凸をなしてのこり、叩きによる痕跡とみられる。底部に近い部分には粗い回転ナデの痕跡が残る。高台はほぼ打ち欠かれている。壺の断面は付着物で覆われ、胎土の観察は困難であった。
- (17) 同時期の遺物として荒尾市南園1号窯跡採集品があると網田氏から教示を得た。また大牟田片平窯跡にも類例がある。
- (18) 静岡県三嶋大社の「梅蒔手箱」(13世紀)、和歌山県熊野速玉大社の蒔絵手箱11点(14世紀後半)、和歌山件阿須賀神社の「松椿蒔絵手箱(14世紀後半)」などが知られる。
- (19) 「整然とした女性遺骸の頭蓋骨下に神獣鏡1面」が検出され、その近くで「管玉数十個、櫛数個、異形鉄製品等が発見され」と報告される(賀川1958:p.59)。この「異形鉄製品」について、三島氏は出土状況の図を示してこれが鐻であることを指摘している(三島1977:p.57、第15図)。
- (20) 薬師如来座像は像高65cm、檜の一本割矧造で、仏像と文書は重要文化財に指定されている。文化2(1805)年の修理時に胎内の納入品が発見された。
- (21) 交名状とは、氏姓名を書して仏像との縁を結ぶものをいう。
- (22) ホシキスタの小孔は外側から回転によって穿孔され、ハナマルユキでは穿孔後横方向(図の水平方向)の擦切によって孔が拡大されている。加工の状況から後者は後世に手が加えられた可能性もある。
- (23) 『小右記』七月十一日に御養産、産養(うぶやしない)の儀式において「擲采の戯」の記述がある。
- (24) 同様のことは柳田國男氏も早く指摘している。「燕の子安貝といふ言葉などは日本では相應に古く、あの小鳥が常世の國から、貝を嘴にくはへて飛んで來ることがあるといふ言ひ傳へが、我邦にも有つたことは察せられるが、それがどんな形をした貝であつたやら、是だけはまだ明らかになつたとは言へない。しかし竹取物語のあの個條が、やや下品な諧謔を目的とし、子安といふ言葉には別にちがつた内容がありさうにも無いのだから、やはり今日と同じ様な連想と俗信とが、もうあの頃からあつたものと見てよいのだろう。」(柳田1950: pp.156～157)
- (25) 南方熊楠1985『燕石考』『南方熊楠選集』第6巻、pp.289～310、平凡社。1880年の『ネイチャー』第21巻に掲載された質問に答える形のもの。未発表英文手稿による。
- (26) 延喜5年(905)に編纂が始まり、延長5年(927)に完成して、その後版が重ねられ、康保4年(967)より施行されたとされる。
- (27) 現代語訳は鈴木真海氏によった(木村・鈴木1931: pp.111～115)。
- (28) 書き下し文は、屋敷信晴氏による。
- (29) 書き下し文は、屋敷信晴氏による。

- (30) 忍澤氏は房総半島の複数の海岸、伊豆諸島の複数の島において自らタカラガイの打ち上げ貝の採集を行い、三浦半島については池田等・渡辺政美両氏の調査成果を整理し、合わせてデータを公開・分析している。小稿はこれを使用したものである。
- (31) 安房国から貢納されている「貝母八両」について、享保8年の板本と『倭名類聚抄』では「貝母」であるが、内閣文庫蔵本・雲州家校本所引京本・雲州家校本所引貞本では「貝子」とすることが校注にある。後者であれば、安房国でもタカラガイが貢納されていたことになる。「八両」は320gであり、同じタカラガイ産地ながら上総国よりかなり少量となる。因みに「貝母」は『和名考異』では波波久利、加波久尔、波末久利とされる。
- (32) 中国陝西省西安市何家村の唐代窖藏で出土した「一斤二両半」の墨書をもつ銀製容器の重さ740gから換算した値で、1斤が640gとなる。
- (33) 筆者が海岸で採集したハナマルユキ等のタカラガイ五個の平均の重さ。
- (34) これについて白井祥平氏は琉球列島各地のタカラガイの方言（スピ、シビ等）を集めて、これが女性器にかかわる名称であることを指摘しているが、そうであればこうした意識に対応する具体的な民俗事象が欲しいところである。14～15世紀以降、琉球列島のタカラガイは島内では漁撈具として、対外的には交易品として普遍化することをふまえると、方言名もこのような行為に関連して生まれた可能性強いのではないだろうか。付図で明らかのように、方言においても、南島は大和と独立した関係にあるとみる方が考えやすい。
- (35) 柳田氏は沖縄の伝統社会におけるタカラガイの使用について、次のような疑問をのべている。「沖縄諸島のやうに頸部飾りの習俗が久しく傳はり、是に宗教的諫關心を寄せ續けていた社會に於て、どうして又あの様に手近に豊富に産出し、且つあれほどまで美しく、變化の奇を極めて居るといつてよい寶の貝を、わざと避けたかと思ふばかり、利用の外に置いて居たのかといふことが説明されねばなぬ」（柳田1961：p.153）。タカラガイの生貝を初めて目にした人間であればだれしも思うことであるが、これこそが文化の違いを生む前提なのだと思う。



文献

- 網田龍生2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会、pp.358～396頁
- 2009「皮籠田A・B窯跡、古屋敷B窯跡」『荒尾市史 前近代資史料集』荒尾市史編集委員会編、pp.13～26
- 奥谷喬司編著2017『日本近海産貝類図鑑』（第二版）、東海大学出版部
- 忍澤成視2001「縄文時代におけるタカラガイ加工品の素材同定のための基礎的研究—いわゆ南海産貝類の流通経路解明にむけて—」『古代』109、pp. 1～75

2011『貝の考古学』同成社

2018「縄文時代のタカラガイ加工品—その特異な扱いについて—」『民具マンスリー』第51巻第6・7合併号、pp. 4～9、神奈川大学日本常民文化研究所

賀川光夫1958「下山古墳」『大分県の文化財』第1集、p.59、大分県教育委員会

片桐洋一校注・訳1999「竹取物語」、『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集12、pp.11～106、小学館

鎌田久子1972「こやすがみ」『日本民俗事典』、大塚民俗学会、pp.268～269

木村康一（代表）・鈴木真海（訳）1931『新註校訂 國譯本草綱目』、春陽堂書店

京都大学文学部国語学研究室編1968『諸本集成倭名類聚抄』臨川書店

黑板勝美編1937『新訂増補国史大系 延喜式後篇〔普及版〕』吉川弘文館、pp.832～833

黒住耐二2007「平安時代の仏像胎内に納められたタカラガイ類—その採集地の推定—」『千葉県立中央博物館 研究報告 人文科学』第10巻第1号、pp.21～23

坂井義哉編2004『片平窯跡』大牟田市文化調査報告書第58集、大牟田市教育委員会

島袋春美2018「奄美・沖縄・先島諸島のタカラガイ利用」『民具マンスリー』第51巻第6・7合併号、pp.21～27、神奈川大学日本常民文化研究所

白井祥平1997『ものと人間の文化史83-1 貝I』、法政大学出版局

中山晋編2007『渡地村跡—臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第46集

林忠鵬2001『『倭名類聚抄』所引『兼名苑』について』『和漢比較文学』第27号、pp.51～61、和漢比較文学会
増川宏一1992『ものと人間の文化史70 さいころ』、法政大学出版局

三島格1977「鑑及びタカラガイ副葬の蔵骨器について—薩摩大口市・伊佐郡における蔵骨器諸例—」『貝をめぐる考古学』、学生社、pp.38～70。初出は寺師見国氏と連名で1960年に『人類学研究』7-1・2。On the sub-burial Towezzers and Cowrie shells in Chinerary urn at Isa-gun, Okuchi, Satsuma
1977「スピとスピ甕」『貝をめぐる考古学』学生社、pp.71～73。初出は1975『えとのす』第2号であるが、1977年版には補記が足されている。

参考図

日本太平洋岸のタカラガイ科の種数変化

地図内の数値は、調査地に生息するタカラガイ種数

調査地（タカラガイ種数）：北・東から、陸前（2）、伊豆三浦（15）、伊豆大島（22）、志摩（18）、潮ノ岬（48）、紀伊（33）、瀬戸内海（2）、土佐（40）、琉球列島（49）、台湾（45）



「日本太平洋岸のイモガイ科およびタカラガイ科の種数変化（堀越）」『決定版 生物大図鑑』、世界文化社 1986 年、p.355 をもとに作成

- 水野敬三郎1967「一三 薬師如来像」『日本彫刻出土基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇二解説』、中央公論美術出版、pp.41 ～ 46
- 矢島明希子2017「日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の出版－和刻本と図解本」『斯道文庫論集』no.52、pp.87 ～ 114
- 柳田國男1950「寶貝のこと」『文化沖縄 第2巻第7号』沖縄文化協会、『海上の道』筑摩書房（1961）所収 pp.149 ～ 159
- 1961『海上の道』、筑摩書房
- 山里純一1999『古代日本と南島の交流』吉川弘文館